



小さな町期待の落語家

私共の住む中山町は、人口は1万500人ほど、縦面積に至っては山間部も含めて31.15㎢に過ぎない山形県で最も小さな自治体です。県の中央部に位置し、江戸時代には最上川を利用した北前舟の舟運で栄え、芋煮会発祥の地と伝わっていますが、車を走らせれば、ほんの5分で通り過ぎてしまうほどのそんな町にも、最近明るい話題が持ち上がっています。

「山形県から36年ぶりに二ツ目の落語家・春風亭昇りんさん誕生!! しかも、国の重要文化財の旧柏倉九左衛門家の屋敷近くの中山町岡地区出身の若者だとか」小さな町のビッグな明るい出来事に、NPO法人黒塚の里山保存会のメンバーが中心となり「春風亭昇りん中山町後援会」も直ちに発足、現在の会員数は町内外含め220名を超えるほどです。

早速7月に後援会発足記念独演会、11月には秋の独演会と、町は一気に“昇りんの落語ブーム”となっています。(何かと話題の「春風亭昇太」一門のお弟子さんで、実家がリンゴ農家ということもあって“春風亭昇りん”の誕生となったという。) そんな昇りんさんの出囃子が「花笠音頭」であれば、後援会では是非県花の紅花染めの着物を着て高座に上がってほしいとの声が高まり、旧柏倉家のブランド・岡雨印の紅花で染めた着物を仕立てて贈ることになりました。(生地と仕立ては、山形市内の老舗呉服店の「とみひろ」さんにお願ひし、染料の紅餅は私の気持ちとさせていただきます。) まもなく、この紅花染の着物を着て全国の高座から、中山町観光大使として山形県、そして中山町のPRにも一役かっただけではありません。

そんな中、先日NHKの県内ローカル番組「やままる」、続いて「ウィークエンド東北」でも紹介されました。この中でも、「生まれ育った中山町での密な人間関係(わずらわしさを感じた近所付き合いなど)をいつしか嫌っていたのが、実は、古典落語の神髄ともいえる『人情断(はなし)』の原点であったことに気づかされた」と仰っていました。よい郷里に恵まれたと感じていただいたとすれば、私たちにとっても嬉しい限りです。

落語家は前座→二ツ目→真打ちの順で昇進されるそうですが、二ツ目からは自分で創作ものも演じることができるのだとか。「町出身の初めての落語家として、町民の多くの方に喜んでもらっていますが、(人気者の)昇太の弟子ということが大きいと正直思っています...」と話す真摯な態度は、お父様のリンゴも、ますます美味しくなったと好評のように、



人気の後押しになっているようです。ともあれ、背後に霊峰月山を、眼下に紅花と良質米を生み出す山形盆地を見て育った若い断家にとって、町との係わりを続けていくことが話に幅を持たせ、新たな人情断の創作にもつながるものと期待しております。

昇りんさんの真打ち昇進を夢見てこれからも応援して参りたいと思います。

黒沼範子 